

「家」を追われた人々の声

— 世界を読み直すためのドキュメンタリー —

熊岡路矢 (国際政治学、法務省難民審査参与員)

タイでは二度と起きないと言われていた「軍事クーデター」を、2006年9月、貧困層に人気のあったタクシン政権に対して、「国王忠誠」の軍部が起こした。親タクシン派（赤シャツ派）虐殺と同じ場所で行われた2010年大晦日の年越し祭の賑わいに、違和感を覚えたノンタワット・ナムベンジャボン監督は、翌年4月（タイ新年）、タクシン派支持者でありながら集会鎮圧（2000年5月）を兵士として命じられたオードさん（退役）の、東北タイ・シーサケート県への帰郷に同行し、映像とインタビューを通してタイ政治を抉る。東北タイは、1970年代末から多くのカンボジア難民を受け入れた地域でもある。玉突きのように、難民流入により耕作地を失ったタイ農民貧困層は、都会と海外への出稼ぎを強いられた。東北タイ南部では、今も「プレア・ヴィヒア寺院」を巡るカンボジア軍との戦闘が断続する。『空低く 大地高し』は、国境両側で、家・コミュニティを奪われた農民の絶望の声を記録する。「生きるためには逃げなければ」。

『遺言—原発さえなければ』（豊田直巳・野田雅也監督）は、原発事故被災地の人々を追う。被災地の一つ、福島県飯館村は、1980年、苦境にあったカンボジア難民のために、婦人会を中心にX線医療バスをタイ国に寄付した。これが縁となり、80年代半ば飯館村は、関東在住のカンボジア難民の子どもたちに「夏休みキャンプ」の場を提供してくれた。飯館村の篤い人情と山野の美しい風景は忘れがたい。しかし原発事故による放射能汚染に直撃され、家屋も田畑・森

も無事、住民も牛・馬・家畜も元気であったのに「全村避難」という事態になり、大震災から2年半以上が経過する今も、「除染」の成果も限定的で、全村民帰村にはほど遠い状況にある。現在は、飯館村の子どもたちのキャンプ受け入れが他地域によって行われている。

『我々のものではない世界』のマハディ・フレフェル監督は、かつて自身も居住したレバノン南部のアイン・ヘルワ難民キャンプとそこに住む人々を長期取材することで、パレスティナ難民問題の根源に迫ろうとする。キャンプの状況は、監督の友人であるアブ・イヤド青年が漏らす、「食べてはいるが、生きてはいない」という、虚無的で自罰的な心理状態に集約されている。

今日、「ナクバ（占領の大災厄）」から3世代目から4世代目に移ろうとするパレスティナ難民問題を頂点に、冷戦時代より更に拡大された形で、政治・経済・災害に起因する、難民、移住労働者、あるいは帰還可能性のない離散民（ディアスポラ）の困難が拡大されグローバル化されている。アブ・イヤド青年の言う「教育なし、仕事なし、希望なし」のこの世界を、難民や強制的に移動させられた人々の視点で読み直すこと、そして、堅苦しくて面倒だが、その原因追求も解決も、政治、政府、政策の問題として読み解くこと、さらには、「カネ」も大事だが、「カネ」を従属させる価値（観）を垣間見せ、垣間見ること——それらが、映像とそれを視る者に求められている。

■上映

『空低く 大地高し』【IC】 10/11 12:45- [A6] | 10/13 10:00- [CL]

『遺言—原発さえなければ』【CU】 10/11 15:00- [M1]

『我々のものではない世界』【IC】 10/11 10:00- [CL] | 10/15 12:30- [A6]